

# Sophia-R

## Sophia University Repository for Academic Resources

|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 十九世紀末の形而上学批判と新たな価値理想の探究：ニーチェの権力への意志説を中心に  |
| Author(s)    | 梅田, 孝太  |
| Journal      | 哲学論集  |
| Issue Date   | 2015-10-10  |
| Type         | departmental bulletin paper   |
| Text Version | publisher   |
| URL          | <a href="http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000035440">http://digital-archives.sophia.ac.jp/repository/view/repository/00000035440</a> |
| Rights       |   |



上智大学  
SOPHIA UNIVERSITY

## 十九世紀末の形而上学批判と新たな価値理想の探究

——ニーチェの権力への意志説を中心に——

梅田孝太

はじめに

「世紀末の思想家は何を表現したかったのか」——この問いと向き合うなら、十九世紀末にはデカルトやカントのように厳密な概念的思考をもつて体系的な哲学を展開した狭い意味での「哲学者」はいなかったのではないか、という問いをも聴き取ることができるだろう。十九世紀末の特殊な状況に鑑みるならば、そうした旧来の「哲学者」像が大きく揺り動かされたのがこの時代であり、旧来の枠からずれた者を「思想家」と呼んでおくべきだという慎重さが必要にもなるだろう。肝要なのは、このずれを生じさせた「思想家」たちの思惟を丹念にたどり、そこに必然性があつたのかどうかを検討することである。十九世紀末といえば、ニーチェが「神の死」を宣告し、マッハが「絶対的なもの」への疑問符を投じた時代である。つまり、なおも諸科学のうちに残っていた独断的な形而上学の残滓を一掃することを自らの課題とした「思想家」たちの時代であつた。マッハが「科学者」として形而上学を批判したのに比して、ニーチェは時には「心理学者」、時には「詩人」や「作家」でさえあり、形而上学の批判とともに如何なる価値や理想を掲げようとしていたのか判然とせず、その表現方法さえ一定ではない。しかしそれゆえにこそニーチェのテクストは「哲学者とは何者なのか」という問いとともにあり、その研究の意義をめぐる議論を招来し続けているのである。本稿ではまず十九世紀末の特殊な時代状況を概観するために、そこでの議論の焦点のひとつとして力学的世界観とニーチェとの関わりを取り上げ、次に形而上学批判と連動してニーチェが提示した価値理想を考察し、最後にその現代的な射程を模索する。

## 1. ひとつの世界解釈としての科学的世観

ニーチェ（一八四四—一九〇〇）は「科学の世紀」を生きた哲学者である。とりわけ中期ニーチェ哲学の特色は「実証主義」的とまで言われてきた<sup>(1)</sup>。その理由は、一八五〇年代からドイツの諸科学に大きな影響を与えるようになったドイツ唯物論の立場、特に生理学的知見の充実にもとづく「人間の自然化」という潮流をニーチェが引き受けていたからだとされる。一九世紀後半のヨーロッパにおいて、すべての生物が細胞によって成り立ち、エネルギーを外界の物質から摂取することで活動している有機体であるということが知られ、それを裏付けるようなエネルギー保存の法則などの熱力学の発見が有機体としての人間の理解に用立てられた<sup>(2)</sup>。ニーチェがこうした唯物論の知見を理解するための土台を提供したのが、多くの先行研究<sup>(3)</sup>によって明らかにされてきたとおり、新カント派のランゲ (Lange, F. A.) の『唯物論史』（一八六六年）である。ニーチェはこの書を『悲劇の誕生』期から繰り返し精読しており、ドイツ唯物論の知見とそれに対する批判的立場を受容していたとされる<sup>(4)</sup>。これをニーチェ哲学の通時的な枠組みとして考えるならば、ニーチェの自然科学に対する態度は両義的なものだとすることが出来るだろう。一方でニーチェは生理学や生物学など、唯物論的な自然科学を信頼できる後ろ盾として、形而上学的な諸価値を根拠に普遍性を主張するような道徳を攻撃していった。「人間の自然化」に定位置しての「超自然」に対する批判という科学的主義的な側面である。しかし他方ではニーチェは自然科学の成果に対して懐疑的であり、それが明らかにしてきた「自然」の客観性を否定する。こうした側面は後期著作に顕著なのだが、例えば以下のように言われる。

「科学はあらゆる点でまずひとつの価値理想 *Worth-Ideal*、ひとつの価値創造的な権力を必要としており、この権力に仕えることによつてはじめて科学は自らを信じられるのであつて、——科学自体は決して価値創造的ではないのだ」(GM II, 25: S. 402)。

「前提なき」科学なるものは決して存在しない」(GM III, 24: S. 400)とも言われるとおり、「自然」を客観的に追究して

きたはずの諸科学は、実は隠れた動機によって突き動かされてきたのではないか。その動機は人間の生存を導く或る価値が公的に通用するための「権力」に奉仕するものであって、そうして他の価値を虐げてきたのではないか。これがニーチェの自然科学に対する問題意識であり、その批判の矛先は自然科学に癒着している「禁欲主義的理想」に向けられる。この理想は彼岸や至高の諸価値といった「超自然」の世界への信仰であるとともに、「自然」な欲望や意志、生を自ら積極的に否定するような「人間の自己蔑視」を価値のあることと見なすのだと言う (GM III, 25: S. 404)。

はたして人間が自らを否定するために提唱した「自然」とは、具体的には如何なるものであろうか。その好例としてニーチェが挙げるのが諸個物の「自己保存」という概念である。近代の思想家、とりわけ十七世紀にホップズやスピノザらは諸個物の運動の原理を「自己を維持しようとする」「努力 conatus」として、つまり「自己保存」として規定した。こうした「自己保存」を原理とする個物の運動の説明は、十九世紀にもいまだ影響力をもっていたのだろうか。

十九世紀後半のヨーロッパではすでに進化論が活発に議論されており、さらにエネルギーの保存法則が発見され、物理学や生理学、生物学は新たな「世界解釈」に熱中していた。力学的世界観の隆盛である。万有は力学によって数値化されうるというこの世界観のうちで「自然」はエネルギーの効率的な利用のために対象化され、時には道徳的な価値判断よりも経済的合理性が優先されるような時代がすでに到来していたのである。十九世紀末にこの力学的世界観を形而上学の残滓であるとして徹底的に批判したのがマッハとニーチェである。両者は、形而上学の批判を通じて三元論を排斥し、一切を感性的な諸要素に還元したという点で、そしてその還元された諸要素の織りなす世界像が進化論的な前提のもとで考究されていたという点では一致している。しかしながら、「思考経済の法則」で知られるとおりマッハの思惟が経済的合理性によって真かれており、あくまでその合理性にのっとって科学の内部での自己反省に留まったのに対して、ニーチェのそれは「節約」や「保存」とはほど遠いものであった。むしろ「浪費 Verschwendung」や「没落 Untergehen」といった観念が(とりわけ後期の)ニーチェのテクストには散見され、その言葉通りニーチェの思惟においては、實在の本質をとらえるべく、科学的知見とともに詩的な表現や神話的な語りなどが千態万様なアフォリズムのうちに越境的に投入され、目まぐるしく濫費されるのである。マッハとニーチェとの差異についてはここではこれ以上立ち入らないが、ニーチェには経済的合理性に対する挑戦というモチーフがあり、それと近代自然科学に対する外側からの批判というモチーフとが連動していたということが指摘できるだろう。ニーチェ

にとつては「自然」や人間の思惟が節約されるべき貧しさのもとに見られることこそ、スピノザ以来十九世紀にいたるまで蔓延していた「蔑視」なのであり、それらはむしろ無制限なまでに豊穡なものとして理解されねばならないのだと言う。この点を如何に詳しく見ておく。

「生理学者らは、自己保存衝動を生物の根本的な衝動とみなすことについて、よく考え直すべきである」(JGB, 13: S. 27)。「悦ばしき知識」(FWV, 349: S. 585)によれば、「自己保存」の理論をもって「自然」の「蔑視」を決定的に開始したのがスピノザなのだ<sup>(11)</sup>。ニーチェによれば「肺結核のスピノザ」は自らの「窮乏状態」を自然に投影したので、「自己保存」を個物の本質として考えざるをえなかった。「スピノザ流の」近代自然科学<sup>(12)</sup>によって、外的な脅威や闘争状態から身を守り、ひたすら窮乏に堪えることが個物の本質とされてしまったというのである。つまるところニーチェの考えでは、こうしたスピノザの影響下で、客観的な世界観を提示しているつもり自然科学が実は「人間の自己蔑視」の手段になってしまっているのだという。これがニーチェにとつての十九世紀の自然科学のモチーフである。そうした自然科学が提示してきたのは、自虐的な「価値理想」を公的な認識構造とすべくその権力に奉仕するような、可能な「世界解釈」のひとつにすぎない。(JGB, 14: S. 28) ニーチェによれば物理学さえ客観的世界の「説明」ではなく、ある特定の「価値理想」を掲げる遠近法に従う「解釈」である。ここには先述したランゲの擬人化理論の影響が見取れるが、しかしランゲが「感覚器官の生理学」に定位し唯物論的に把握される世界と「概念詩」によって表現される種形而上学な世界との二元論に立っていたのに対して、ニーチェは二元論を拒絶し、あらゆる認識を例外なく遠近法的な「解釈」に一元化している。そこではあらゆる理論、実践、芸術が等しくなんらかの「権力」に奉仕する「解釈」であり、「権力」の強さにしたがってある程度共有される認識構造はあっても、唯一の普遍的な「説明」はありえない。

## 2. もうひとつの世界解釈としての権力への意志説

先に述べたとおり、自然科学に対するニーチェの態度は両義的に解釈されうる。つまり、ニーチェは科学主義者であるように見えつつ、その批判者であるようにも見えるのだ。この両義性を端的な矛盾として棚上げしないために、ニーチェによる科

学批判は部分的なものにとどまっていたと考えるべきだろう。諸科学に癒着した「人間の自己蔑視」を取り除き、本来の「価値理想」のもとで諸科学を推進すること。それがニーチェの科学主義なのである。では、ニーチェは一体如何なる「価値理想」を掲げたのか。これを明らかにするためには、ニーチェの「力」の概念が導きの糸となるだろう。諸個物を「自己保存」に向かわせる「力」という理論の形成の背景に「禁欲主義的理想」が暴かれたように、ニーチェの「力」をめぐる言説の背景には、その「価値理想」が置かれているだろうからである。ニーチェは「力」の本質を「権力への意志」として規定している。

「物理学者らがそれによつて神と世界とを創造した『力』という勝ち誇つた概念には、なお或る補充 *Ergänzung* が必要である。つまりこの概念には、『権力への意志』、即ち権力を示すことに向かつての貪欲な欲求として、もしくは創造的衝動としての権力の使用と行使などとして私が示した、或る内的世界が認められなければならない」(Nachlaß Juni-Juli 1885, 36[31]: KSA Bd. 11, S. 563)。

物理学が事物の運動の原因を記述するための非数学的な第一の概念は「力 *Kraft*」である。ニーチェはこうした物理学的な「力」の概念を「権力への意志」として補充するのだ。<sup>13</sup> この補充操作はもちろん近代の科学主義が提示した世界観の客観性を認めた上でのことではない。先述したとおり、人間知性は「無前提に」世界を認識することはできない (GM III, 24; S. 400)。純粹な「力」の記述などありえないのだ。例えば「窮乏」に苦しみ「自己保存」に向かうものとして「力」の本質を解釈し、諸個物の倫理がそこから導き出されてしまう。これに対して「権力への意志」説は「力」の本質を如何に解釈したのだろうか。ニーチェによれば「力」の本質は「権力の拡大を目指し、その意志のゆえにしばしば自己保存を疑問に付して犠牲にするような、本来的な生の根本衝動」(FW V, 349; S. 586) である。さらに、

「自然のうちに支配しているものは窮迫状況ではなく、過剰であり浪費なのである、それも愚かなまでの浪費である。生存競争とは単に例外にすぎず、生の意志の一時的な制限である。まさに生の意志であるところの権力への意志にした

がつて、大なり小なりの闘争がいたるところで優越を、成長と拡大を、権力を競って争われているのだ」(FW V, 349: S. 585f.)

つまり自然は「窮迫状況」にあるどころか「過剰」なのであって、諸個物は自己を保存するどころか他よりも卓越しようとして自らを「浪費」し、自らのより強大な「権力」を証明するためならば没落をもちとわないのだと言う。諸個物の自己保存ならぬ自己浪費。傲慢な「力」のゆえに諸個物は自ら「犠牲」になるのだ。こうした事態を的確にあらわすニーチェの言葉はただひとつであろう。「悲劇」である。『偶像の黄昏』を續けば、ニーチェの「力」の概念が「悲劇」と密接に結びついていることがわかる。

「苦痛でさえそのうちでは刺激剤として作用するところの溢れ出る生と力の感情としての酒神密儀の心理学は、アリストテレスによつても、とりわけ当世のペシミストたちによつても誤解されているところの、悲劇的感情という概念の鍵を私に与えた。悲劇は、ショーペンハウアーの意味での古代ギリシア人のペシミズムを示す何かを証明することは決してない。むしろ、その決定的な拒否や反対法廷とみなされなければならない。その最も疎遠で最も冷酷な諸問題のうちにあってなお生そのものへと然りを断言すること、その最高の典型を犠牲として捧げ自らの無尽蔵さに狂喜する生への意志——これをこそ私はディオニュソス的と名付け、これをこそ私は悲劇詩人の心理学へといたる橋として察知したのである」(GD, Was ich den Alten verdanke 5: S. 160)。

ニーチェにとつて「悲劇」は端的に聴衆にカタルシスを与える芸術作品でも、ペシミスティックな世界観の象徴でもない。ニーチェはここで単に古代ギリシア悲劇をめぐる芸術論を展開しているのではなく、むしろその核心として、世界の真の有様が「悲劇」であること、そしてそれゆえにこそ生きるに値するということを示すための「心理学」を導出しようとしている。つまり浪費されるだけの個物としての生の苦悩も、それを「悲劇」として理解するならば、その犠牲を悦ぶ心理、「浪費の快」が見出されるのである。

「古代ギリシア人はこうした密儀をもって何を自らに保証したのであろうか。永遠の生であり、生の永遠回帰である。過去に約束され捧げられた未来である。死と転変を越えての生に対する勝ち誇った肯定である。生殖による、性の密儀による総体的な永世としての真の生である」(GFD, Was ich den Alten verdanke 4: S. 159)。

この「真の生 das wahre Leben」や「総体的な永世 Gesamt-Fortleben」は生殖を通じた、「生きとし生けるもの das alle Lebendige」の総体的な連鎖として実在するものであつて、彼岸を意味しない。そもそもニーチェは「禁欲主義的理想」が現世の苦悩に対する報いとして掲げてきたいわゆる「死後の生 Fortleben」を認めない。「浪費」に彼岸での見返りは無いのだ。しかしむしろ、個物が浪費されるという苦しみによつてはじめて生の連鎖が現実存続してゆくのである。「死後の生」の報いに代えて、生の連鎖のために自らが浪費されることを悦ぶということ。それが「悲劇詩人の心理学」であり、ニーチェによる生の肯定の方途なのである。

このようにしてニーチェの「力」をめぐる言説の根底には、「生の永遠回帰」がひとつの「価値理想」になつていて考えられる。ならば、「禁欲主義的理想」が「超自然の世界」に対する信仰のもとで生を否定し、窮乏の中の「自己保存」を諸個物の本質としたのに対して、ニーチェは「生の永遠回帰」を「価値理想」として、「浪費」される苦しみにまみれた諸個物の生を肯定し、過剰の中での「自己浪費」を諸個物の本質とみなしたのである。

### 3. 人間社会の本質は悲劇的か

ニーチェの「権力への意志」説は「生の永遠回帰」という理想を掲げ、そのために諸個物が卓越を競い浪費されてゆくという悲劇的な世界解釈を提示した。自然主義的な死生観と「死後の生」の観念なしに生きる実存的態度の表明であると言つてもよいだろう。こうした洞察の啓蒙は、現代社会の諸問題の解決の糸口たりうるだろうか。これを政治の問題としたときに、「卓越」の基準をはき違えたのがナチズムによるニーチェ哲学の歪曲<sup>15)</sup>であつたことはもはや周知のことであろう。その反省のもとで、果たしてニーチェ哲学が掲げた「価値理想」が如何なる問題領域に貢献し、またどれだけの現代的な意義をもちうる

のかを慎重に検討しなければならない。以下では近代批判、政治哲学、美学についての見通しを概括的に提示したい。

第一に、ニーチェの科学主義的な言説についてそれが近代批判としての意義をもっているかどうかの見通しを検討したい。まず、ポスト・モダンの一部の思想家によって喧伝されてきたような、普遍主義からの解放を唱えた近代批判の旗手としてのニーチェ像は一面的なものにとどまっていると言わざるを得ない。ハバーマスが指摘したとおり、ニーチェ的な近代批判の系譜が端的に普遍主義に対する一貫性を欠いた攻撃であるなら、その攻撃は消極的なニヒリズムと非合理性性に対する屈服しか帰結しないからである。ニーチェ哲学の科学主義が近代批判として機能しうるとしたら、それが新たな「価値理想」を掲げ、人間の「成熟」を促す限りにおいてである。ここでいう新たな「価値理想」とは先述したとおり「生の永遠回帰」であるのだから、それに奉仕するような科学のみが推進されてしかるべきであり、学者はそうした科学のもとに自己を浪費してはじめて「成熟」するということにならう。だが、果たしてどのような科学ならば「生の永遠回帰」に奉仕すると認められうるのだろうか。例えばニーチェは「善悪の彼岸」において将来の諸科学の女王としての心理学を、「道徳を乗り越えてゆく」ものとして規定している（JGB, 23: S. 38）。将来の心理学は良心の呼びかけさえも裏切り、それがそもそも反道徳的な意志から生じたものであるということをつまみ生の連鎖のための手段にすぎないということを暴露するのだという。こうした方向性の「成熟」が二十一世紀の常識からも疎遠なものであることは明らかだろう。良心あればこそ今日の生命倫理や環境倫理の重要性が認識されうるからである。ニーチェの「成熟」への呼びかけは、かえって近代にもはつきりと息づいている良心のはたらしきを明るみに出すのである。

第二に、ニーチェの「権力への意志」説が実践哲学の領域、とりわけ政治哲学の領域に貢献しうる可能性を検討したい。今日の民主制の政治的現実には多数派による少数派の圧殺という事態を生じさせている。如何に対話の機会が設けられているといえども、価値評価の尺度は多数派が握っている。それが権力の局所的な集中を許さない健全な社会のあり方というものだ。だが、ウェーバーやトクヴィルらが指摘したとおり、「民主制は衆愚政治である」のかもしれない。民主制が機能しているはずの国家において、無知や無反省、愛憎や、端に手続き主義的なものに従って多数派の判断が造り出されているようにさえ思える。思想史を續けば、こうした「衆愚政治」の対立軸として、真に卓越した少数者による政治、卓越主義のユートピアが繰り返し構想されてきたことがわかる。ニーチェの政治理論もまた、卓越主義の政治理論として解釈可能だろう。たしかに、ニー

チエの姿勢は結局のところリベラル個人主義的な概念図式のひとつの典型例にすぎないとも言われ、また他方ではカントが指摘したような「啓蒙の時代」を自覺的に生きたニーチェの思想は「自由な個人」の理想を追究し、近代社会の政治的な「成熟」を促すものだとまで言われてきた。<sup>10</sup>しかし、ニーチェはラディカルな自由主義の立場からあくまで卓越主義を標榜し、貴族と奴隷との位階秩序の確立を求めていた。このとき、ニーチェが考究していたのは社会の文化的・精神的な価値の位階であつて政治的現実のダイナミックな変革を求めていたわけではないという一定の留保が必要だろう。<sup>11</sup>いずれにせよ先行研究の議論では、ニーチェが少数派の権利の代弁者だつたとする解釈がおおむね基調となつている。普遍的に妥当する道徳を詐称する多数派によつて、高貴なる少数派の文化や精神が圧殺されることは許されないと、というわけだ。ニーチェの「価値理想」に照らして考察するならば、少数派を少数派であらしめる高貴さは「力の過剰」にもとづく「自己浪費」によつて規定されるべき価値であり、将来の総体的な生の可能性（、具体的には文化的アイデンティティの多様性の増大や生存圏の拡大）のための礎となるべき者の徳であり、これは裏を返せば、あらゆる既存の国家や宗教、道徳を浪費し没落させるような、それらからの自由でもある。このように、自由の問題こそがニーチェの政治哲学的解釈の最大の論点であるだろう。

第三に、ニーチェの「価値理想」を美学の観点から評価する可能性を指摘しておきたい。というのも、諸個物の自己浪費としての自然の在り様を「悲劇」として是認するというニーチェの観点が、そもそも美的なものだと言えるからである。例えばニーチェの「悲劇」概念に固有の発想である「浪費の快」説からは、人間の感性にとつて「犠牲」という事象が「快」を呼び起こす共通の誘因である可能性を読み取ることができらるだろう。理性的な対話によつてコンセンサスを得る可能性が裏切られ続ける現代社会の様相を説明する鍵はこうした美学的な観点にあるのかもしれない。

以上、概括的に三つの問題領域を提示したが、いずれの領域にも共通する問題は、今日ニーチェ哲学を研究する意義とは何かということである。本稿で試みたのは、ニーチェ哲学に刻印されている十九世紀末の議論が、現代社会の多様な論点と地続きになつていくことを浮き彫りにすることであつた。諸科学の専門分化と分業体制が急速に進展した十九世紀の議論の核になつていたのは、形而上学批判や力学的世界観の隆盛とそれに対する失望、資本主義思想の定着等を通じて多様化し混乱に陥つた価値理想の探究であり、実在性の新たな規定を求めての認識の冒険の再出発であつた。その試みを引き継いだのが現象学をはじめとする現代思想なのだが、直接の源泉であつたはずの十九世紀の議論の多くは、例えば心理学や生理学、経済学

の哲学は未解明なままにとどまっている。その再検討が現代社会の諸問題の構造の解明につながっているだろうことは論を俵たない。

(付記) 拙論は二〇一四年十月二十六日に開催された上智哲学会第八一回大会シンポジウム「ニーチェ——世紀末の思想家は何を表現したかったのか——」における筆者の提題「悲劇的認識としての権力への意志説」に一部加筆と修正を施したものである。

## 凡例

ニーチェのテクストは以下のものを使用した。

„Kritische Studienausgabe“(=KSA), Nietzsche, *Sämtliche Werke*, Hrsg. von G. Colli und M. Montinari, Berlin/New York, W. de Gruyter und München, dtv, 1980.

ニーチェの著作からの引用は、(略号・節番号: KSAの頁数)で示した。略号は以下のとおり。また、遺稿については(書かれた時期、ノート番号【断片番号】: KSAの巻数、頁数)を記した。なお、原文の強調はすべて省略した。

*FW: Fröhliche Wissenschaft*, 1882, KSA 3: 343-651. = 『**哀れな知識**』。

*JGB: Jenseits von Gut und Böse*, 1886, KSA 5: 9-243. = 『**善悪の彼岸**』。

*GM: Zur Genealogie der Moral*, 1887, KSA 5: 245-412. = 『**道徳の系譜**』。

*GD: Götzen-Dämmerung oder Wieman mit dem Hammer philosophiert*, 1889, KSA 6: S. 55-161. = 『**偶像の黄昏**』。

## 注

(1) ルー・ザロメによつてニーチェの思索の発展段階は三段階に特徴づけされ、諸著作は三つの時期に分けられた。その第二期(いわゆる中期の「人間的、あまりに人間的」『曙光』、『悦ばしき知識』)は「実証主義精神期」と呼ばれる。

Andreas-Salomé, L. (1894), *Friedrich Nietzsche in seinen Werken*, Leipzig: Neuauflage Insel Verlag, Frankfurt am Main, 1983.

(2) 例えがマイヤー (Mayer, J. R.) による「力の保存法則」論文である「生命なき自然界における力についての考察 Bemerkungen über die Kräfte der unbelebten Natur」は一八四二年のものである。『ニーチェを

所蔵していた『有機体の運動と物質代謝の関係 *Die organische Bewegung in ihrem Zusammenhang mit dem Stoffwechsel*』の出版は一八四五年のことであった。以下を参照のこと。

Campioni, G. (Hrsg.), (2003), *Nietzsches Persönliche Bibliothek. Supplementa Nietzscheana*, Bd. 6. Berlin/ New York: Walter de Gruyter, S. 378.

- (3) ランゲからニーチェが学んだのは生理学的知見に裏打ちされた懐疑主義である。これをパラフレーズするならば人間知性は生物としての固有な主観性や生理学的諸条件を自然の事物の把握に際して投影してしまうので、世界は人間の生理学的本質によって常にすでに人間にとって生きやすい世界へと歪曲されている、という擬人化理論だと言えよう。ニーチェによるランゲの『唯物論史』の受容については以下の研究を参照。

Salguarda, J. (1978), "Nietzsche und Lange", in: *Nietzsche-Studien*. Bd. 7. Berlin/ New York: Walter de Gruyter. S. 239-258.

Stack, G. J. (1983), "Lange und Nietzsche", *Monographien und Texte zur Nietzsche-Forschung*. Bd.

10. Berlin/ New York: Walter de Gruyter. (＝眞田収一郎訳、『ニーチェ哲学の基礎 ランゲとニーチェ』、未知谷 二〇〇六年)。

- (4) ニーチェはマイヤーやフォイエエルバッハ (Feuerbach, L.), ビュヒナー (Büchner, L.), モルスロット (Moleschott, J.), ヘルムホルツ (Helmholz, H.) が切り開いた領域から、生理学的に規定された「自然」な人間像を抽出し、その知見はとりわけ「曙光」(一八八一年)以降の著作の随所に本格的に反映されていった。以下の英訳冒頭の紹介文では「曙光」におけるニーチェの主張の基本的な理論の背景、受容源泉と「道徳に対する攻撃」の自然主義的な解釈が示されている。

Clark, M and B. Leiter (eds.), (1997), *Daybreak: Thoughts on the Prejudices of Morality*. Cambridge University Press.

- (5) 「権力」は「曙光」以降のニーチェ哲学の術語であり、生存を導く或るひとつの価値を真なるものと認めることによって自らの生存を支配し、またその支配構造に他者を取り込むような統制力を指す。

- (6) この論点は『道徳の系譜』第三論文に詳しい。「禁欲主義的理想」の核心は「真理への意志」であり、真理を追究する諸科学の営みとこの理想との癒着が同論文の主題のひとつである。

- (7) 「人間の自己蔑視」は『道徳の系譜』第三論文でも主要なテーマである。ニーチェによれば先史時代、他者を虐げようとする残酷な意志がその外化に挫折したときに、自らを

統制すべく「意識」が生まれたのだという。残酷さの内  
向化が人間の「良心の疚しさ」の起源であり、この自罰  
的な意志によって人間は「地上でもっとも興味深い動物」  
となった。同様の筋書きについては以下の研究を参照。

Janaway, Ch., (2007), "Guilt, Bad Conscience, and  
Self-Punishment" in: Leiter, B and N. Sinhababu [ed],  
*Nietzsche and Morality*. Oxford: Clarendon Press/ New  
York: Oxford University Press.

(8) 「各々すべてのもものが、自己の存在を保持しようと努める」  
ような、その「自己保存の努力」をスピノザは諸個物の「現  
実の本質」として規定している (*Ethica* III, Prop. 7)。

(9) 「富の追求」のために合理化を推し進める趨勢がヨーロッ  
パを覆っていたという状況については、例えばそれに対  
して鋭い警鐘を鳴らしたイギリスのジョン・ラスキン  
(Ruskin, J. 1819-1900) の『最後の書』(一八六二  
年) で浮き彫りになっている。

Ruskin, J., (1862), "*Unto this last": four essays on the  
first principles of political economy*". London: Smith,  
Elder & Co.

(10) 以下を参照のこと。

木田元「マッハとニーチェ 世紀転換期思想史」、講談社  
学術文庫、二〇一四年。

野家啓一「無根拠からの出発」、勁草書房、一九九三年。

(11) 個物にとつての「努力」が個物自体の「自己完成」への

過程であり、それが同時に全体としての自然の「自己完  
成」への過程であるとすると点を十分に分析していない点  
で、ここでのニーチェによるスピノザの「努力」概念の  
評価は一方的で一面的なものに留まると言えるだろう。  
ニーチェがクーノー・フィッシャーの書物のうちに自ら  
の「先駆者」(二八八一年六月オーバーベック宛書簡)と  
してスピノザを発見し、その出会いが「ツアラトゥスト  
ラはこう語った」に示されるような決定論的世界観や「運  
命愛」の観念に影響を与えたであろうことは先行研究に  
よって明らかにされたとおりである。しかし『善悪の彼  
岸』や『悦ばしき知識』に付された第五書など後期諸著  
作では本論で示したとおりその評価は反転した。

Brohier, Th. H. (2008), *Nietzsche's Philosophical  
Context: An Intellectual Biography*. Urbana-Chicago:  
University of Illinois Press. pp. 78ff.

(12) ここには、外的要因による進化説として理解された限り

でのスペンサー流のダーウィニズムや、「万人に対する闘  
争」の中で「自己保存」を徳と見なしたホップズ、有  
機体におけるエネルギー摂取の目的を自己保存とみなす  
生理学等が含まれるだろう。とりわけホップズの「闘争」  
概念には、もはや自然がコスモスとみなされずにカオス  
として理解されるようになった近代的な自然観が表れて

いると見ることが出来る。ホップズとニーチェとの関連については以下を参照。

Müller, S. (1991), *Topographien der Moderne: Philosophische Perspektiven – literarische Spiegelungen*, München.

- (13) 「権力への意志」論が物理学的な「力」の概念を補充するひとつの仮説であるという解釈は、Gerhardt, (1996), S. 84; Stack, (1983), S. 220, S. 240f. によりに指摘されていなければならない。

Gerhardt, V. (1996), *Vom Willen zur Macht: Anthropologie und Metaphysik der Macht am exemplarischen Fall Friedrich Nietzsches*. Berlin/ New York: Walter de Gruyter.

- (14) ニーチェによる「悲劇」理解の要になっているのは独自の「快」の概念である。その「快」は自己をなせるべく残酷に支配して浪費することを通じて生じるような「快」なのだ。これを Janaway, Ch. は上巻の Leiter, [ed.], (2007) 所収の論文において「残酷の中の快」説 (pleasure-in-cruelty thesis) と呼ぶ。同じく「快」はおそらくマンヒズムやヒロイズムとも連関しているが、これ以上の分析は今後の課題としたい。ただ、こうした「快」が「悲劇」と結びつけられるがゆえに、美学上のいわゆる「悲劇の快のアポリア」の問題つまり「悲

しみ」と「快」とが如何に一致するかという問題と共に論じられることがあるが、ニーチェの主題はあくまで「浪費の快」であり、そのためには個体の生存を越えた観点から、つまり「自然」の観点から「悲劇」を論じなければならぬ。美学上の問題については以下を参照のこと。

- (15) 西村清和、「悲劇の快をめぐるアポリア」、『美学』第四十卷第四号 (第百六十号)、美学会、一〇一頁、一九九〇年。

Riedel, M. (1997), *Nietzsche in Weimar. Ein Deutsches Drama*. Leipzig: Reclam. (= 恒吉良隆他訳「ニーチェ思想の歪曲 受容をめぐる100年のドラマ」、白水社、二〇〇〇年)。政治哲学的なニーチェ解釈が盛んな英米圏での研究においては「人間には位階がある」というニーチェ政治哲学の前提である「卓越」の基準を精神的なものにおくことで、ニーチェを卓越主義的な自由主義者として受容する傾向が基調となっていると言えるだろう。

- (16) Habermas, J. (1986), *The Philosophical Discourse of Modernity*. Cambridge.

- (17) MacIntyre, A. (1981), *After Virtue*. Notre Dame: University of Notre Dame Press.

- (18) Owen, D. (1994), *Maturity and Modernity: Nietzsche, Weber, Foucault and the Ambivalence of Reason*. London: Routledge.

- (19) Kunnas, T. (1982), *Die Politik als Prostitution des*

*Geistes: eine Studie über das Politische bei Nietzsche.*  
München: Edition Wissenschaft & Literatur.